FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2015.3.13 No.50

平成27年度 企画展

明治の写真師 丸木利陽（まるきりよう）

写真は江戸末期に日本に伝わり、明治に入ると全国各地で誕生した写真師によって、急速に普及しました。そうした中、福井出身の写真師で、東京で写真館を開業した丸木利陽という人物がいます。彼は、明治天皇の「御真影」を撮影した御用写真師として知られ、明治～大正期に、皇族をはじめ、華族・官僚・軍人など当時の有力者を数多く撮影しました。

その写真の多くが、このたび丸木利陽のご子孫から当館に寄託されました。本展では、これらの写真を一挙公開します。あわせて、同時期に福井で活躍した写真師が撮影した写真も紹介します。明治期に東京と福井で活躍した写真師をとおして、写真普及の様相を探ります。

1、写真師 丸木利陽

丸木利陽は、安政元年(1854)に福井城下の竹内宗十郎家に生まれました。その後、福井藩士丸木利平家の養子となり、明治8年(1875)に単身上京し、写真師の二見朝陽のもとで修行、同13年に新シ橋（現霞が関1丁目）に写真館を独立開業しました。写真館は木造一部二階建て、写場は屋根の一部がガラス張りで、自然光を取り入れた撮影を行っていたようです。

その後、徐々に彼の評判が高まり、同20年には嘉仁親王（後の大正天皇）が近衛連隊兵営訪問の際に、親王と皇族、将校などとの集合写真の撮影に指名されました。翌21年には、政府の依頼で、外国人画家キヨッソーネが描いたスケッチをもとにした明治天皇の肖像画を撮影しました。これが、いわゆる「御真影」と呼ばれる写真です。このことが転機となり、当時、社会的地位の高い人物の写真撮影を手がけるようになりました。

そして、丸木写真館が新しい国会議事堂の建設用地となったことから、隣地に石造りの写真館を新たに建設しました。そこには、独自に開発した照明器具を設置し、夜間撮影も行えるようになりました。

さらに、22年には、写真師鈴木真一とともに皇后の肖像を撮影し、その写真は先の明治天皇の御真影と対で、国内外に広まっていきました。これ以降、丸木写真館は皇族・華族・政治家などにより多く利用されるようになりました。

同館で撮影された人物の中には、伊藤博文、山縣有朋、松方正義、板垣退助、榎本武揚、岩崎弥之助、福沢諭吉、岩倉具視、山本権兵衛など、当時を代表する政財界の要人や学者や軍人、さらには歌舞伎役者の五代中村歌右衛門や七代松本幸四郎などの芸能関係者も見られます。

丸木利陽が撮影した写真の大半は肖像写真で、その特徴は、全体の構図やポーズが整えられ、派手さはなく、極めて簡素なものでした。また、撮影の背景には、女性や子ども、皇族などの例を除いては、たいへんシンプルな背景画が用いられています。これは、よりオーソドックスな写真を望む上流階層のニーズが

左から：丸木利陽／明治天皇「御真影」
丸木利陽が撮影した伊藤博文／丸木写真館

あったからともいわれています。なかでも、顔の向きは正面向きよりも横や斜め向きとし、側面に光をあて、鼻筋や頬の輪郭が目立つように撮影しています。こうして撮影された肖像写真は、明治期を代表する日本人のイメージを国内外だけでなく、後世に伝える役割を果たしたといえます。

2、福井の写真師

丸木利陽が活躍した明治期、地元福井でも数多くの写真師が誕生し、写真館を開業しています。その中には、現在も続く写真館も少なくありません。福井では、すでに明治初期には写真師（司）を名乗る人物が現れます。福井一乗町（現福井市順化２）の「写真司　旭斎」が撮影した風景や人物写真が残っています。また、明治10年(1877)、松平春嶽・茂昭が来福した際に、「後藤東作」が両氏の大礼服着用の姿を撮影したとの記録もあります。しかし、両者とも営業写真館であったかどうかは確認できません。

明治10年代にはいると、営業写真館が登場します。福井では勝木惣三郎が、明治15年(1882)12月に写真場を新築し、新聞広告を出しています。建物は、屋根や壁の一部をガラス張りにした構造となっています。さらに、同17年には、後藤景八が同様のガラス張りの写真場を開館しています。

20年代にはいると、福井では吾妻館、鯖江では恵美写真館、敦賀では鶴田写真館などの開業が確認できます。また、写真館の開業は確認できませんが、福井では楠昌太や永田外太、三国では形浦安太郎といった写真師がいたことが確かめられます。

30年代にはいると、武生に勝写真館、大野に安田写真館、勝山に藤田写真館、敦賀に松平写真館、小浜に柴田写真館、丸岡に天真館が開業しています。さらに、40年代にも新たに開業した写真館が確認できます。このように、明治20年代後半から40年代にかけて、数多くの写真館が開業しており、明治期に県内には40人程の写真師がいたことが確認されます。

これらの写真師によって撮影された写真の多くは人物（肖像）写真です。それらには、顧客が何かの記念で撮影したものや、自身の写真を親戚や友人に贈呈するために撮影されたものが多く見られます。また、30年代以降に多く見られるのが学校の卒業写真です。写真館のスタジオで撮影される人物写真のほかに、学校など写真館外へ出張しての写真撮影が盛んに行われるようになったようです。さらに、人物や集合写真のほかに、風景や建物の写真も撮影されようになりました。そのひとつが、30年代以降に盛んに発行されるようになった絵葉書に使われた写真です。これらの絵葉書の中には、撮影者である写真館の名が記されているものがいくつか見られます。

さらには、40年代には郡誌や案内記、写真帳などに掲載された風景や建物などの写真が、県内の写真師によって撮影されています。

こうして明治の写真師たちによって撮影された写真は、当時の社会の姿をビジュアルに伝える歴史資料として、注目を浴びています。しかし、写真の被写体だけでなく、それを撮影した写真師にもスポットをあてる必要があるのではないでしょうか。　（山形裕之）

上：写真台紙（福井　吾妻館）
左：写真台紙（写真師　楠昌太）

明治15年開業の勝木写真館（『福井県下商工便覧』より）

絵はがき（恵美写真館撮影）

企画展「明治の写真師 丸木利陽」
平成27年4月25日（土）～5月31日（日）
観覧料：通常の入館料でご覧になれます。（一般100円、70歳以上・高校生以下無料）　※20名以上の団体は２割引

館蔵資料紹介

鯖江市長泉寺経塚出土の一字一石経

当館が収蔵する考古資料の中に、小さな河原石1個に文字を1文字ずつ書いた石があります。

これは考古学の専門用語で「一字一石経」と呼ばれるものであり、経文を石に書き写したものです。こうした遺物を埋納した遺跡を経塚と呼びます。

鯖江市長泉寺経塚は、現在の鯖江市西山町に所在し、国道417号線を挟んで鯖江市まなべ館の反対側、NTT関連施設の辺りに所在していましたが、残念ながら現在では消滅してしまい見ることはできません。

本経塚は、大正10年3月刊行の『若狭及越前に於ける奈良朝以後の主なる史蹟』（福井県史蹟勝地調査報告第二冊）に「長泉寺発見の経塚」として「今立郡舟津村大字長泉寺なる嚮陽山麓に接せる畑地の岸に稍高き塚ありしを大正6年5月初旬発掘せしに面積二坪餘に小形の河原石（礫石）の堆積あり就て見るに何れも文字を墨書し其堆積の中央に金銅製の経筒を発見せり。（後略）」と、上田三平氏により報告（以下、上田報告と略）がされています。しかし、本報告では遺跡及び出土品の写真や図面などが掲載されていなかったことから、注目を集めることはありませんでした。

本経塚出土品が多くの人々の間で知られるようになったのは、石田茂作氏が『茶わん』昭和14年9月号に書かれた「経筒の話」の中で、六角宝幢式経筒を図版入りで紹介（写真1）されて以後のことであり、その後は数々の書籍等で経筒のみが紹介されるようになりました。

この経筒は、出土した早い段階で東京帝室博物館（現東京国立博物館）の収蔵品となったのですが、経筒と共に出土した経石については紹介されることはなく、上田報告に、経石が出土した事のみが一言、記されたのみでした。

当館が所蔵する経石（写真2）が、この時に出土したものであることは、所蔵する16点全てに上田報告の内容と一致する下記のラベルが貼付されていることから、特定することができます。

「今立郡舟津村　長泉寺経塚発見　大正6年5月134」

末尾の数字は個々の経石固有の番号であり「134～149」を確認することができ、恐らく当初は1からの連番になっていたものと想定されます。

経石は、直径3.5～6.5センチを測る小型の玉砂利を用ており、1石に1文字ずつ墨で文字を記しています。現存する16点のうち、8点は墨が薄く判読はできませんが、残りの経石には「盡」「定」「二」「善」「難」「我」「衆」「度」を読むことができます。

本遺跡のように一字一石経を埋納した経塚からは、時として数千から、多いと数万点に上る経石が出土します。

本経塚から、どれだけの量の経石が出土したのかについては分かりませんが、上田報告には、経石が堆積し、その堆積層の中央に経筒が置かれていたと記されているので、本経塚からも多量の経石が出土したものと考えられます。しかし、その大部分は長い年月の間に失われてしまい、今となっては、今回紹介した16点が残されるのみになってしまいました。

これら16点の経石は、数年前に福井大学から寄贈を受た考古学資料群の中に含まれていたもので、いわば地元にも忘れられていた資料を再発見したことになります。この再発見により経筒のみが知られていた長泉寺経塚について、経石も含めた本来の遺物のセットで見ることができるようになったことは、大変に意義深いことです。

（水村伸行）

写真１ 六角宝幢式経筒

写真2 一字一石経

館蔵資料紹介

饅頭箱

法 量　43.1×37.0×62.8(cm)
(重箱)　33.2×26.7×51.6(cm)

福井県嶺北地方ではマンジュマキ、もしくはマンジュウマキ(饅頭まき)といって、婚礼の際に饅頭をまくことがあります。マンジュマキは、嫁が婚家(嫁入り先)に入る時に行なわれます。このマンジュマキも他の祭りや行事などと同じように、地区によっても様々な形がありますが、今回は紹介する資料のあった福井市を例にとって説明します。

結納の後、様々な準備が終わり、嫁入りの前日や前々日、場合によっては当日に嫁入り道具が婚家へ運び込まれます。当日になると、嫁は仲人に連れられ実家の仏壇に参るなどして、近所の人などに見送られ、家を出ます。嫁が婚家に近づいてくると、その家の隣近所や親戚の者が嫁を迎えます。これをチカムカエといいます。チカムカエで歓迎された嫁はそのまま家に入ります。家に入る際には、イッショウミズ(一升水)といい、その家で汲んだ水を飲み、その水の入っていた茶碗などはその場で割ります。その後、仏壇へ参ります。その仏壇参りをしている間に、嫁入り先の親戚の者が2階や屋根に上り、家の外にいる見物人に饅頭をまきます。この饅頭の準備は嫁の家や親戚が準備したり、嫁入り先の親戚が準備したりと地区や家によっても違いがあるようです。饅頭は菓子店に注文したもので、菓子店では饅頭をマンジュウバコ(饅頭箱)と呼ばれる漆塗りの箱に入れ、婚家へ運びます。運ばれた饅頭箱は家の前に並べられました。

今回紹介する饅頭箱は福井市順化の菓子店のものでした。この菓子店は昭和4年(1929)に開業し、2代にわたって続きましたが、平成22年(2010)に廃業しました。店を開いた初代は、京都などで修業したのち、独立して開店しました。高価なヤマトイモ(山芋)をすりおろし、砂糖や米粉を加えて作った薯蕷饅頭が自慢の商品で、開店した当時には、このような薯蕷饅頭を作っている店はこの店以外にはなかったといわれています。

一般に、饅頭箱の多くは赤く塗られていますが、この資料は「高級感を出すため」に黒く塗られており、客の評判も良かったといわれています。箱の中の重箱に饅頭をつめましたが、最大で150個がつめられました。しかし、結婚式場が婚礼の主な会場になってくると、式場では工場の大量生産品の饅頭を取り扱うようになり、この菓子店ではマンジュマキの饅頭を取り扱うこともなくなり、この饅頭箱も使われなくなりました。

マンジュマキそのものも見られなくなったといわれており、特に「この10年くらいで見なくなった」といわれています。現在でも行われていないわけではありませんが、一昔前に比べると随分と少なくなったようです。また、最近では結婚式場で行われる披露宴での余興の一つとして行われていることもあります。　(川波久志)

マンジュマキ(昭和51年〈1976〉,福井市)

饅頭箱

饅頭箱の中の重箱

研究ノート

三崎専蔵の京都遊学をめぐって

－三崎玉雲家と福井の種痘事業－

強い感染力をもち致死率の高かった疱瘡(天然痘)は、江戸時代に大変恐れられていた伝染病でした。1796年、イギリスのジェンナーが画期的な天然痘対策として開発した牛痘種痘法(牛の天然痘を接種することで免疫をつける予防法)が、福井の町医・笠原良策を中心とする種痘事業によって幕末の福井に普及したことは、よく知られています。ところで『福井市史』によれば、福井城下で代々医薬を業とした旧家の三崎玉雲(12代道生)は、笠原の種痘事業に対して深い理解と関心を持ち、援助と協力を惜しまなかったといいます。では、幕末の三崎家が蘭方医学に基づく種痘法を受容し、種痘事業に積極的に関与した背景には、何があったのでしょうか。小稿では、当館蔵「三崎玉雲家旧蔵文書」から、三崎家の一青年医師の遊学事例を紹介し、この疑問に迫ってみたいと思います。

三崎玉雲家の家系

はじめに、三崎玉雲家の家系について確認しておきましょう。三崎家は朝倉氏二代高景の四男、三段崎弼景を家祖としています。16世紀中頃、三段崎安景の子、安指が一乗谷に滞在していた谷野一栢から医術の相伝を受けて医師となり、三崎玉雲軒を称しました(初代三崎玉雲)。朝倉氏滅亡後、北庄へ移った三崎家の居所は足羽山北側の能登町にあり、慶長2年(1597)には堀秀治から諸役免除の特権を与えられています。

近世初期には福井藩の藩医として仕えましたが、3代宗益・4代道庵父子のとき、貞享3年(1686)のいわゆる「貞享の半知」の際に御暇を下され、町医となりました。しかし、その後もたびたび福井藩から療治(主に小児科)や家伝の薬である牛黄円の献上を命じられ、御目見や帯刀を許されるなど、城下町医の中では別格の家筋を誇りました。

さて、幕末の当主である12代道生は、天保3年(1832)に福井藩士の大関家より養子に入り、家督を継ぎましたが、跡取りの男子に恵まれず、天保14年頃、同じく福井藩士の永見家から専蔵を養子に迎えました。次に見るように、「三崎玉雲家旧蔵文書」中の数多くの書状から、この専蔵が弘化4年(1847)11月から翌年2月にかけての約4ヶ月間、京都へ医師修業のための遊学をしていたことがわかりました。

専蔵の遊学とその背景

弘化4年11月3日、専蔵は、大岩本立(福井の蘭方医・大岩主一の弟)とともに、京都に到着しました。その日は越前関係者の定宿である福井屋重助方(富小路三条下ル)に一泊し、翌4日、2人は日野鼎哉塾(東洞院四条上ル)に入塾しました。

日野鼎哉は、はじめ豊後国日出藩の学者・帆足万里に師事し、次いで長崎の鳴滝塾でシーボルトから蘭方医学を学んだ人物で、笠原の師にあたります。ほかに半井元冲(福井藩医)や大岩主一も日野から学んでおり、専蔵らが京都の日野塾の門を叩いたのも彼らの紹介・斡旋があったためでした。また専蔵らは遊学中、日野の高弟である桐山元中によく世話になったといいます。

いったい、彼らは日野塾でどのようなことを学んでいたのでしょうか。詳しくわかる記録は残念ながら残されていませんが、遊学中の専蔵に宛てられた書状には、「福井城下では疱瘡が流行するとの噂があり、深淵に臨むが如く、家内も日夜心配しています」(弘化4年11月21日付三崎道生書状)、「福井では近々疱瘡が流行するはずなので、そのつもりでいっそう修業に精進しなさい」(弘化5年1月19日付半井元冲書状)などと、とくに疱瘡に関する文面が散見されます。

この前年の弘化3年、笠原は福井藩へ種痘事業に関

する最初の嘆願書を提出していました。これは取り上げられませんでしたが、嘉永元年（1848、弘化5年2月28日より嘉永と改元）8月に再願し、採用されました。オランダ船によって長崎にもたらされた痘苗（ワクチン）を、笠原が日野や桐山たちと協力して伝苗し、福井で本格的な種痘事業を開始したのは嘉永2年11月のことです。

専蔵たちの遊学はこうした時期のさなかにあり、笠原らと同じ日野塾への入塾、また約4ヶ月という期間の短さからいって、遊学の目的は蘭方医学のなかでもとりわけ種痘法の修得にあったのではないでしょうか。遊学中の専蔵を激励する笠原・半井・大岩主一からの書状の数々は、福井の藩医・町医を超えた蘭方医学をめぐる交流に、三崎家の専蔵も加わっていたことを示しています。

養父・道生からの書状

専蔵の京都遊学中、養父・道生から専蔵へ送られた書状は7通残っています。内容の多くは、専蔵の幼い2人の娘（お高・お歌）をはじめ家族の無事や近況を知らせるものですが、次のような興味深い点も浮かび上がってきます。

ひとつは、専蔵が京都で積極的に医学書などを購入または筆写し、道生のもとへ送り届けていることです。主なものに、日野鼎哉著『痘瘡秘蘊』や帆足万里著『傷寒論新注』、フーフェランド著『幼々精義』（小児科医学書）などがあります。専蔵の遊学を通じて、三崎家に最新の知識がもたらされることになったといえます。

また逆に、専蔵が道生へ「三崎家蔵書の『昆斯』（コンスブリック著、内科医学書）を正玄に筆写させて京都へ送ってほしい」と依頼したこともあります。余談ですが、このとき道生は「正玄の筆は見事だが大変高価になってしまい、かつ彼は手間取る人物だ」と難色を示しています。正玄とはおそらく正玄五三郎尚事、すなわちのちに幕末の福井の歌人として名を残した、橘曙覧のことだと考えられます。

もうひとつは、三崎家が専蔵の遊学を経済的な面で援助していたことです。遊学中の経費は井筒屋忠兵衛（二条通室町東入ル、越前府中商家の出店）を介して仕送りし、専蔵の帰郷が近づくと、旅費や日野への謝礼金なども工面しています。また、日野や桐山への贈答品として、鴨や蟹、鱒の味噌漬けなどを福井から贈っていました。こうした三崎家の厚い支援があってはじめて、専蔵の京都遊学が可能となったのです。

さらに道生は専蔵の学問への姿勢について、「以前の手紙で本も読み飽きたと言っていましたが、『異人に会わずんば異書を看よ（優れた人に会えないなら優れた本を読め、の意）』という古い諺もあります。あなたは幸運にも異人を師とし、そのうえ異書を読めば、さまざまなことが上達するはずなのに、はるばる上京して暫くの間に読書も飽きたとは何とも残念なことです。学問が上達し、天下の書物をすべて読み飽きたということならば本望なのですが」（弘化5年1月20日付三崎道生書状、写真1）と、皮肉交じりに諭しています。専蔵に対する道生の思いが表れたエピソードといえるでしょう。

なお、大岩本立は病に倒れた母の介抱のため、先に福井に帰りましたが（2月1日着）、専蔵は無事遊学を終えて2月29日に帰郷しました。

写真1　弘化5年1月20日付三崎道生書状（三崎玉雲家旧蔵文書112）

三崎玉雲家と種痘事業

三崎家の跡取りとして活躍を強く期待されていた専蔵でしたが、実際には笠原の種痘事業に参加することは叶いませんでした。遊学から帰郷した翌年、嘉永2年5月12日に急死したからです。じつは遊学中の書状でも専蔵はしきりに「持病」を心配されており、まだ30歳にも満たない若さでの病死だったと考えられます。その後、専蔵の遺志は養父・道生が果たしていくことになります。

嘉永2年11月、痘苗を京都から福井へ持ち帰った笠原は、城下に仮設の除痘館を開設し、ここで種痘を開始しました。このときに定められた除痘館の規則書「除痘館誓約」には、笠原の署名に続いて除痘館に出勤し協力した町医たちが署名していますが、その筆頭に三崎玉雲道生の名前があります。笠原が残した当時の記録をみると、笠原は除痘館の中でとくに道生の働きぶりに信頼を寄せていたようです。専蔵没後に福井藩士の一柳家より三崎家に養子入りした英順も、のちに除痘館の活動に加わるようになりました。

一方で、藩士の家を出自とする道生には藩医身分への志向性がみられ、三崎家が藩医に列せられることを望んでいたようです。すでに天保14年12月に道生は、町医ながら「御小児科」（福井藩の小児科専門医）の名目を許されていましたが、除痘館が藩営事業となった嘉永4年10月、それまでの種痘事業への貢献により「町支配被指除、御匙医師取扱」とされ、町医から藩医に準ずる身分へと位置づけられました。さらに安政3年（1856）5月には、藩に願って5人扶持の表医師となり、正式に藩医に取り立てられました（写真2）。

今日において福井での種痘の普及が語られるときには、やはり笠原の苦心の様子がクローズアップされがちです。もちろん笠原の事績に異論を唱えることはできませんが、以上に見てきたように、そこには笠原とともに種痘を推進した日野門下の医師たちの学統ネットワーク、そして代々の医家として町医の中心的位置にあった三崎家と専蔵の存在があったことも忘れてはならないでしょう。（久角健二）

【参考文献】

『福井県医学史』（福井県医師会、1968）

『福井市史』資料編9 近世七（1994）

『白神記―白神用往来留―』（福井県医師会、1997）

海原亮『江戸時代の医師修業―学問・学統・遊学―』（吉川弘文館、2014）

写真2　安政3年5月14日付御用書（三崎玉雲家旧蔵文書507）

ふくいミュージアム No.1～20抄目録

広報誌「ふくいミュージアム」は、今回の発行分をもって50号を迎えました。
これを記念して、創刊から今回分までの抄目録を掲載します。

▶ No.1　1982.1.1

- 「本県文化の中核施設に」福井県知事 中川平太夫
- 県立博物館の基本構想
- 県立博物館の位置と建物
- 常設展示について～ガイドウォールやビデオコーナーも～
- 収蔵資料の一部から「鹿類下顎骨化石」東洋一／「新溜古墳の石棺」青木豊昭／「横市経塚経石」久保智康／「台ランプ」村野隆男／「田の神の馬」坂本育男

▶ No.2　1982.7.1

- 「県立博物館の開設準備にあたって」福井県立博物館建設準備委員会会長 塚野善蔵
- 建設工事スタート
- 展示計画大きく前進～実施設計まとまる～
- 収蔵資料の一部から「ビカリヤ」東洋一／「室谷廃寺の心礎」青木豊昭／「後花園天皇宸筆御書状」山形裕之／「農鍛冶のはし」坂本育男／「有線ビロード織物」橋脇孝幸

▶ No.3　1983.3.1

- 「地域における博物館」福井県立博物館建設準備委員 西川新次
- 私たちは、県立博物館に期待します！
- ビデオライブラリーで楽しく学習！
- レプリカ製作始まる！
- 博物館と調査研究
- 仏像調査雑感
- 収蔵資料の一部から「中生代ワニ化石」東洋一／「石刀」青木豊昭／「金銅板納札」久保智康／「キリシタン高札」村野隆男／「シュラ」坂本育男

▶ No.4　1984.2.1

- 「新しい文化を形づくる～県立博物館の設計監理をおえて～」佐藤武夫設計事務所 細田雅春
- ご覧下さい！開館間近の博物館
- 博物館資料の収蔵・保管について
- 「西谷山2号墳の発掘調査」青木豊昭
- 収蔵資料の一部から「素弁九弁蓮華文軒丸瓦」久保智康／「船箪笥（懸硯）」山形裕之／「作り初めの大根」坂本育男／「若狭塗り四段重箱」長坂一郎／「旧県立福井高等女学校制服～石田縞～」橋脇孝幸

▶ No.5　1984.7.1

- 「ごあいさつ」福井県立博物館長 杉原丈夫
- 県立博物館落成記念式
- 開館記念特別展「福井の文化財」開催
- 盛況！開館記念講演　元東京大学教授 笠原一男氏
- 昭和59年度博物館教育普及事業計画

▶ No.6　1984.10.1

- 「県立博物館の教育普及行事について」坂本育男
- 研究ノート「越前の石棺について」青木豊昭
- 資料紹介「木造 観音菩薩立像」長坂一郎
- ビデオライブラリーから　福井の四季／土と炎の歴史（越前焼）
- 郷土の人物シリーズ「文化人 朝倉義景」山形裕之

▶ No.7　1985.3.1

- 博物館60年度の特別展
- 研究ノート「中新世チャートについて」東洋一
- 収蔵資料の紹介「須恵器 蔵骨器」久保智康／「能面 筋怪士」長坂一郎
- 郷土の人物シリーズ「刀匠 越前康継」村野隆男
- ビデオライブラリーから　真宗の村／機を織る

▶ No.8　1985.7.1

- 「県博1年の活動を顧みて」学芸課長 青木豊昭
- 東京国立博物館巡回展「日本の美」開催間近！
- 特別展「北前船と越前・若狭」を終えて
- 研究ノート「清永のデンガクから～福井の婚姻習俗研究のための試み～」坂本育男
- 収蔵資料の紹介「太刀（銘守弘）」村野隆男／「田の神祭の神輿」坂本育男
- 郷土の人物シリーズ「鉱物学者 故市川新松先生」東洋一
- ビデオライブラリーから　鯖街道／白山への祈り

▶ No.9　1986.3.1

- 博物館61年度の特別展
- 研究ノート「白山周辺の虚空蔵菩薩像の像容について」長坂一郎
- 収蔵資料の紹介「鰭脚類化石」東洋一／「独鈷石」青木豊昭
- 郷土の人物シリーズ「福井生糸の先覚者 坪田孫助」田中敏博
- ビデオライブラリーから　越前海岸の海女たち／縄文土器

▶ No.10　1986.11.1

- 第5回 特別展「古鏡の美～出土鏡を中心に～」開催中！
- 冬の特別陳列（予告）「ふるさとの文化財～仏画～」
- 新しくなった体験学習室
- 研究ノート「越前康継の所持銘から」村野隆男
- 収蔵資料の紹介「能面 邯鄲男」長坂一郎／「朝倉義景感状」山形裕之
- 郷土の人物シリーズ「考古学の先達 上田三平」青木豊昭
- ビデオライブラリーから　一乗谷～甦った戦国城下町～／トチの実を食べる

▶ No.11　1987.3.1

- 昭和62年 春の特別展「曳山～その魅力と伝統～」
- 昭和62年 秋の特別展「福井の山岳信仰展（仮称）」
- 伝統工芸コーナーに越前焼が加わりました！
- 研究ノート「越前国大虫廃寺出土軒丸瓦小考」久保智康
- 収蔵資料紹介「紺糸匂威胴丸」村野隆男／「越前三筋壺と珠洲壺」青木豊昭
- 郷土の人物シリーズ「望月信亨」長坂一郎
- ビデオライブラリーから　自然の資源と私たち／紙を漉く

▶ No.12　1987.10.1

- 秋の特別展「山々への祈り～越前五山の神と仏～」
- 冬の共催展「越前ゆかりの名刀展～武将の象徴・社寺の秘蔵～」
- 研究ノート「千嶋講について」山形裕之
- 資料ニュース「大発見！鳥の足跡化石」東洋一
- 郷土の人物シリーズ「錦耕三」坂本育男
- 新作ビデオライブラリー　湿原の植物～敦賀市池の河内～／カラスを呼ぶお正月～常神半島・神子～

▶ No.13　1988.3.31

- 昭和63年度 春の特別展「知られざる古墳時代～その生産・技術を探る～」
- 夏の共催展「神々のかたち～仮面と神像～」
- 『福井県立博物館総合案内』の発刊
- 研究ノート「敦賀市山の烏帽子着～「初午」と「直し」～」田中敏博
- 収蔵資料の紹介「解体新書（全五冊）」貴志真人／「刀（銘）大和大掾藤原正則」村野隆男
- 郷土の人物シリーズ「生江臣東人」久保智康
- ビデオライブラリーから　若狭の寺／雪の中の暮らし

▶ No.14　1988.9.30

- 第9回 特別展「武将のいでたち～福井ゆかりの甲冑と武具～」
- 冬の企画展「白山周辺のそり」
- 研究ノート「若者組と夜学生～本県近代青年集団史の試み（1）～」笠松雅弘
- 資料ニュース「「加賀コレクション」寄託される！」笠松雅弘
- 郷土の人物シリーズ「一宮長常」貴志真人
- 新作ビデオライブラリーから　化石が語る福井の5億年／北前船

▶ No.15　1989.3.25

- 第10回 特別展「描かれた越前若狭～江戸時代の絵図～」
- 共催展「人類誕生400万年展～人はサルから生まれた～」
- 常設展示がリフレッシュ！～開館5周年の常設展示更新～
- 研究ノート「解体新書と小田野直武」貴志真人
- 資料紹介「樹皮の民具」坂本育男
- 郷土の人物シリーズ「杉田定一 その①」笠松雅弘
- ビデオライブラリーから　古墳を掘る／石田縞の復元

▶ No.16　1989.9.30

- 第11回 特別展「石をめぐる歴史と文化～笏谷石とその周辺～」
- 冬の企画「館蔵品展」
- 研究ノート「手取層群の恐竜化石」東洋一
- 資料紹介「自郷学舎」生徒の書籍・筆記帳」笠松雅弘
- ビデオライブラリーから　焼畑～赤かぶらをつくる～／北陸古代の玉つくり

▶ No.17　1990.3.20

- 春の特別展「恐竜時代～日本と中国～」
- 秋の特別展「福井県の誕生～明治の「ふくい」～」
- 研究ノート「テゾリの利用の事例と展望」坂本育男
- 資料紹介「ガラス灯」笠松雅弘
- ビデオライブラリーから　若狭のみほとけ／伝統工芸に生きる

▶ No.18　1990.9.30

- 秋の特別展「文明開化の光と影～福井県／その誕生期～」
- 冬の企画「館蔵品展」
- 研究ノート「武生市 横根寺 観音堂 木造千手観音立像について」長坂一郎
- 資料紹介「本県初記録のイヌタデ属2種」若杉孝生／「幻のスミレ属2種」若杉孝生
- ビデオライブラリーから　かわら～北陸瓦作りの歴史～／越前の平安彫像

▶ No.19　1991.3.20

- 春の特別展「川の生活誌～そのめぐみと恐れ～」
- 秋の特別展「慈悲の造形～越前の観音～」
- 研究ノート「古代越前の山中寺院」久保智康
- 資料紹介「オゴケと産飯・枕飯」田中敏博
- ビデオライブラリーから　祝部の村／東尋坊の自然

▶ No.20　1991.9.30

- 秋の特別展「慈悲の造形～越前の観音～」
- 冬の企画「館蔵資料展」
- 研究ノート「鰭脚類の進化と福井県産化石ついて」竹山憲市
- 資料紹介「イグアノドン科の上顎骨」東洋一
- ビデオライブラリーから　福井県誕生物語／若狭の盆

ふくいミュージアム No.21～50抄目録

▶ No.21　1992.3.31

- 春の企画「館蔵資料展～ふるさと再発見 Part 2～」
- 秋の企画「生命の大進化～中国の化石でたどる35億年～」
- 研究ノート「福井県内出土の皇朝十二銭について」仁科章
- 資料紹介「さまざまな横杵」坂本育男
- ビデオライブラリーから　鳥浜貝塚～縄文時代のくらし～／遠敷のこども神輿

▶ No.22　1992.9.30

- 秋の企画「生命の大進化～中国の化石でたどる35億年～」
- 冬の企画「館蔵資料展」
- 研究ノート「近世越前赤瓦の刻印～柴神社旧拝殿所用赤瓦の検討～」中原義史
- 資料紹介「大坂の船絵馬」山形裕之
- 恐竜化石発掘ニュース
- ビデオライブラリーから　佐分利のオオガセ／絹のできるまで

▶ No.23　1993.3.31

- 研究ノート「恐竜の足跡化石と手取層群の古環境」東洋一
- 資料紹介「石冠」仁科章
- ビデオライブラリーから　継体天皇の謎／三国祭りの日

▶ No.24　1993.10.31

- 資料紹介「坂井港港銭取立所の「回議綴」」山形裕之
- 資料紹介「銅造 阿弥陀如来立像」長坂一郎
- ビデオライブラリーから　福井と日本海／阿曽の豊年祭り

▶ No.25　1994.3.31

- 春の特別展「北陸の玉～古代のアクセサリー～」
- 資料紹介「恐竜足跡の化石」宮川利弘
- 夏の特別展「よそおい・いのり・おどり～環日本海の人と祭り～」

▶ No.26　1994.10.30

- 「中国浙江省の博物館視察」仁科章
- 資料紹介「夢楽洞「まんし天神」」笠松雅弘
- 夏のこども向け特別企画「恐竜王国ふくい・こどもサマースクール' 94～こどものための最新恐竜学講座～」
- 恐竜化石発掘ニュース

▶ No.27　1995.3.31

- 春・夏の特別展「フクイリュウとその仲間たち～手取層群の恐竜～」
- 研究ノート「戦国時代の医家の茶の湯と庭」藤原武二
- ニューフェイス　学芸員 澤博勝

▶ No.28　1995.10.1

- 研究ノート「近世後期越前真宗信仰の一側面～吉崎をめぐる諸相～」澤博勝
- 資料紹介「武生市下ノ宮遺跡出土資料」中原義史
- 夏の親子向け特別企画「恐竜王国ふくい・親子サマースクール' 95～親子で学ぶ最新恐竜学講座～」

▶ No.29　1996.3.31

- 春の特別展「夢楽洞万司の世界～江戸後期の民衆文化～」
- 研究ノート「福井県に伝わる在来筵機」坂本育男
- コラム「モンゴル高原国際恐竜調査紀行」川越光洋

▶ No.30　1996.11.30

- 研究ノート「北前船」という言葉について」山形裕之
- 資料紹介「墨書土器」仁科章
- 【回顧】春季特別展「夢楽洞万司の世界」笠松雅弘
- 活動紹介「博物館実習」中原義史
- 解説「復元夢楽洞絵馬「大織冠（海士）図」」笠松雅弘

▶ No.31　1997.3.31

- 企画展紹介「波濤をこえた文化交流」～中国浙江省の文物展～
- 研究ノート「白亜紀の日本にはサンゴ礁が広がっていたのか？」佐野晋一
- 活動紹介「絵馬の修理と保存について」山形裕之
- 解説「復元、江戸前期の絵馬「相撲（赤沢山大相撲）図」」笠松雅弘

▶ No.32　1997.12.1

- 資料紹介「「崇寧重宝」と日本」中原義史
- 資料紹介「今立郡池田町の管巻き」坂本育男
- 「土佐の芝居絵「絵金」の視察報告～越前の「万司」との比較～」笠松雅弘
- 新人紹介　総括文化財調査員 山口充／学芸員 瓜生由起

▶ No.33　1998.3.31

- 特別展紹介「発掘された日本列島' 98～新発見考古速報展～」「ふくい発掘最前線」
- 資料紹介「今秋の特別展あれこれ」山口充
- 研究ノート「越前吉崎の「由緒地」化をめぐって」澤博勝

▶ No.34　1998.12.1

- 「古代の文献と考古学」中司照世
- 資料紹介「福井市新溜古墳出土の玉類」中原義史

▶ No.35　1999.3.31

- 「むらはずれの題目供養塔」坂本育男
- 「第2次恐竜化石発掘調査」千秋利弘
- 「ヨーロッパの絵馬二景」笠松雅弘

▶ No.36　1999.9.30

- 「館長就任にあたり」平井聖
- 特別展「モノから学ぶ～博物館のおもしろ実験展～」
- 「碧玉製の合子」中司照世
- 「武生市浄秀寺の越前赤瓦」中原義史

▶ No.37　2000.3.31

- 「いま改めて博物館を考える」笠松雅弘
- 「文字を記す、モノに記す」瓜生由起

▶ No.38　2000.9.30

- 「新しい地域博物館をめざして～歴史博物館へのリニューアル構想～」笠松雅弘
- 「滑石製の車輪石～新収蔵品について～」中司照世

▶ No.39　2001.3.31

- 「あなたの声で展示が変わる～来館者調査による展示評価に思うこと～」瓜生由起
- 「越前海岸の戦没者墓塔の観察から」坂本育男
- 「瀧谷寺と福井城の越前瓦」中原義史

▶ No.40　2001.9.30

- 人気企画をふりかえる「ちょっと昔のくらしぶり」
- 新人紹介「学芸員という仕事」窪田裕美

▶ No.41　2002.3.31

- 博物館が生まれかわる！どのようにかわる？

▶ No.42　2011.3.30

- 平成23年度 特別展「鉄道博覧会～日本と福井の鉄道のあゆみ～」
- 館蔵資料紹介「華南三彩花樹紋盤」河村健史／「昭和戦前期の敦賀町写真綴り」山形裕之／「CIC宛て書簡」瓜生由起
- 研究ノート「『記録簿』に見る儀礼と贈答」坂本育男

▶ No.43　2011.9.30

- 平成23年度 文化財公開展「美山の神仏（かみほとけ）～ふたつの樺八幡神社より～」
- 館蔵資料紹介「福井県復興宝くじ」山形裕之／「漆塗盆」瓜生由起／「風呂」川波久志
- 研究ノート「駅弁の掛紙～歴史資料としての有効性について～」水村伸行

▶ No.44　2012.3.14

- 平成24年度 特別展「玩具の100年～玩具でたどる明治・大正・昭和～」
- 館蔵資料紹介「福井江戸往還図屏風」山形裕之／「ヴァルトゼーミュラー アジア図」水村伸行／「高田義久撮影・まつり写真資料」川波久志
- 研究ノート「越前の定朝様仏像～中手樺八幡神社阿弥陀如来坐像を例として～」河村健史

▶ No.45　2012.9.28

- 平成24年度秋期企画展「泰澄ゆかりの神仏（かみほとけ）」
- 館蔵資料紹介「駅弁貼込帳から～ある旅行者による今庄駅「上等御弁当」の感想～」水村伸行／「歓喜天社」川波久志／「橘家文書・織田信長定書」久角健二
- 研究ノート「百貨店・だるま屋の「コドモの国」～遊技場から屋上遊園地まで～」瓜生由起

▶ No.46　2013.3.15

- 平成25年度 特別展「福井の面とまつり」
- 館蔵資料紹介「橘家文書・夢楽人万司直筆和歌二首」久角健二／「小型狛犬（17点）」瓜生由起
- 寄託資料紹介「竹下善一氏の写真アルバム」山形裕之
- 研究ノート「初期神像に見る神仏習合～泰澄寺所蔵僧形坐像（伝泰澄大師蔵）を例として～」河村健史

▶ No.47　2013.11.15

- 新春特別企画「干支の午」展より「乗馬の風習は古墳時代から～椀貸山2号墳出土の馬具～」水村伸行
- 館蔵資料紹介「ロバート・ブラウトン氏旧蔵写真（186点）」瓜生由起／「橘家伝来太鼓胴」久角健二
- 研究ノート「愛染寺所蔵薬師如来坐像～神明神社ゆかりのほとけ～」河村健史

▶ No.48　2014.3.14

- 平成26年度 特別展「敦賀湊と三国湊」
- 館蔵資料紹介「敦賀市沓見出土の初期須恵器の一例」水村伸行／「天目茶碗」河村健史／「昭和十五年度満州建設勤労奉仕隊手帳」瓜生由起
- 研究ノート「大湊神社のお獅子様祭り」川波久志

▶ No.49　2014.9.26

- 平成26年度 秋期企画展「白山曼荼羅～描かれた神々と観音信仰～」
- 寄託資料紹介「福井空襲写真アルバム（1点/37枚）」瓜生由起
- 館蔵資料紹介「墨書銘のある桶」川波久志／「敦賀中橋町牛腸覚録」久角健二
- 研究ノート「北陸本線における戦後食堂車の復活について」水村伸行

▶ No.50　2015.3.11

- 平成27年度 企画展「明治の写真師 丸木利陽」
- 館蔵資料紹介「鯖江市長泉寺経塚出土の一字一石経」水村伸行／「饅頭箱」川波久志
- 研究ノート「三崎専蔵の京都遊学をめぐって～三崎玉雲家と福井の種痘事業～」久角健二

博物館日誌（平成26年10月～平成27年2月）

10月

- **10日（金）**
  福井商工会議所来館（資料貸出）
- **15日（水）～18日（土）**
  資料燻蒸処理（燻蒸室）
- **17日（金）～18日（土）**
  福井大学教育地域科学部社会系教育講座来館（資料調査）
- **20日（月）～23日（木）**
  資料燻蒸処理（燻蒸室）
- **25日（土）～11月24日（月・祝）**
  秋期企画展「白山曼荼羅」展（特別展示室）
- **25日（土）～12月5日（金）**
  写真展「古写真が語る白山三馬場」（エントランスギャラリー）
- **26日（日）**
  キッズミュージアム「かけ仏を作ろう！」（研修室）
- **30日（木）**
  フレッグ食品来館（資料調査）
- **31日（金）**
  あわら市教育委員会来館（写真撮影）

11月

- **1日（土）**
  企画展「白山曼荼羅」展示説明会（特別展示室）
- **9日（日）**
  バスツアー「泰澄の寺大谷寺と滝波五智如来をめぐる」
- **15日（土）**
  ふくい歴博講座「泰澄と越前の観音信仰」（研修室）
- **20日（木）**
  北名古屋市歴史民俗博物館来館（資料調査）
- **23日（日）**
  白山姫神といただく茶会（エントランスロビー）
- **25日（火）**
  福井県博物館協議会講演会（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）
- **28日（金）**
  福井大学博物館実習

12月

- **6日（土）～平成27年1月27日（火）**
  ギャラリー展「干支の末＆十二支の年賀状」（エントランスギャラリー）
- **7日（日）**
  キッズミュージアム「クラフト年賀状を作ろう！」（研修室）
- **22日（月）～25日（木）**
  資料燻蒸処理（燻蒸室）
- **28日（日）～1月2日（金）**
  年末年始のため休館

1月

- **3日（土）～2月22日（日）**
  新春特別企画「ふくいの天神」（特別展示室）
- **10日（土）**
  「ふくいの天神」展示説明会（特別展示室）
- **13日（火）**
  あわら市教育委員会来館（資料貸出）
- **17日（土）**
  ふくい歴博講座「やさしい古文書講座①北庄城下商人の古文書」（研修室）
- **18日（日）**
  「天神講」の茶会（エントランスロビー）
- **21日（水）、22日（木）**
  東京大学史料編纂所来館（資料調査・撮影）
- **27日（火）**
  福井市立橘曙覧記念文学館来館（資料調査）
- **27日（火）**
  九州国立博物館来館（資料調査）
- **29日（木）～3月1日（日）**
  写真展「雪と鉄道」（エントランスギャラリー）

2月

- **1日（日）**
  記録映画上映会「豪雪の記録」（講堂）
- **5日（木）**
  東京国立文化財研究所来館（資料調査）
- **7日（土）**
  「ふくいの天神」展示説明会（特別展示室）
- **8日（日）**
  記録映画上映会「豪雪の記録」（講堂）
- **12日（木）**
  消防訓練（全館）
- **20日（金）**
  福井県立こども歴史文化館来館（資料調査）
- **21日（土）**
  ふくい歴博講座「やさしい古文書講座②北庄城下商人の古文書」（研修室）
- **26日（木）**
  福井県博物館協議会講演会（研修室）

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮2-19-15　TEL.0776-22-4675㈹
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.50　平成27年3月13日発行